

## Round-table における討論内容の要約 Summary of Round-table discussions

嘉山郁美 (アマースト大学)  
Ikumi Kayama (Amherst College)

### 1. はじめに

本稿は学会二日目に行なわれた **Round-table** にて話し合われた内容を要約したものである。**Round-table** は学会のゲストスピーカーである三人の先生方(當作先生、クルンパー先生、庄司先生)を囲み、二十名が参加して行なわれた。ゲストスピーカーの先生方には二つの部屋に分かれていただき、参加者も十名ずつ二つのグループに分かれ、グループ **A** は當作先生と一緒に、グループ **B** はクルンパー先生・庄司先生と一緒に約一時間討論をした。その後、10分の休憩をはさんで参加者がグループごと入れ替わり、グループ **B** が當作先生と、グループ **A** がクルンパー先生・庄司先生と一緒にさらに一時間程討論を行なった。参加者には事前に討論の録音と内容の記述について許可をいただいた上で、討論をすべて録音させていただいた。以下の要約は、當作先生との討論、クルンパー先生・庄司先生との討論の順に討論の中でトピックまたは質問毎にまとめて記述しており、実際の発言の順に全ての発言を逐語的に記述したものではない。また個人名は記載していないが、當作先生のみ許可をいただきお名前を記載させていただいている。

### 2. 當作先生との討論

以下の六つに分けて要約する。

- (1) AP 試験における文化について
- (2) Professional development について
- (3) 大学の中上級レベルの問題と differentiated instruction について
- (4) 教科書の文法項目について
- (5) 漢字について
- (6) アーティキュレーション と宣伝活動 (advocacy) について

## (1) AP 試験における文化について

質問 1: 文化の試験の目的は何か。

當作先生: AP 試験は Japanese Language and Culture Course Description (The College Board, 2008) に沿って教えたコースの試験、つまりアチーブメントテストであるから、当然 Course Description に基づいて作られている。そしてその Course Description はスタンダードズ (standards) に基づいて作られているため、AP 試験においては、スタンダードズの中の文化の定義に従ってテストをするという制約がある。「文化」にはいろいろな定義があるが、スタンダードズにおける文化の一番の特徴は、どのようにその文化を捉えるかという点である。そして、三つの“P”(product, practice, perspective)で捉えらとされており、その中でも“perspective”が最も重要だとされている。文化を教える目標にもいろいろな考え方があるが、スタンダードズでの考え方は、日本人と同じ文化を頭の中に作り上げるというよりは、日本語を外国人として話している時の日本文化を身につけるという思考により近い。

質問 2: 文化を習得するとはどういうことか。

當作先生: 文化とは文化を背負っている人たちの共通項である、などと捉えることができるかもしれないが、それはあくまでも一つの考え方であり決定的なものではない。一つの集約した日本文化というものもあり得ない。外国人として日本語を学んでいる時の文化というものもそれぞれ異なる。このように、文化とは何かというのははっきりしていないし、今後はっきりするのかどうかもわからない。しかし、だからといって文化を無視していいことにはならない。外国語のクラスの中で文化は大きい役割を果たしている。私たち教師が「コミュニケーションができる学生を作りたい」という目標を持っている時、言語だけを教えて言語に付随した文化を教えずに果たしてコミュニケーションが適切にできる学生ができるかは疑問である。したがって現状では、明確な定義ができていなくても、仮説で文化を考えてやっていかざるを得ないと考えている。

質問 3: スタンダードズを基にして AP 試験が作られているが、スタンダードズは完璧なものではない。スタンダードズの方を変えていくという動きはないのか。

當作先生： スタンダードには学習者・教師・教師研修のスタンダードの三つがあるが、これらは完全に決まったものではなくこれからも変わっていくであろうものである。実際、スタンダードを管理する **National Standards Executive Board** には、スタンダードの内容はどうか、スタンダードはどのように使われていて、うまく機能しているのか、というような観点からスタンダードを見直そうという動きがある。

質問 4： なぜこの形式の試験を文化の試験と呼ぶのか。また文化の試験はどのように採点されるのか。

當作先生： 文化の習得過程は調べられないから、習得を顕在化させるためには話したり書いたりさせるしかなく、試験においても話したり書いたりしてもらう以外に評価の方法がないため、このような形式になっている。他の様々な試験と同様、**AP** 試験にも制約があり、その制約の中でどのようにしたら文化を一番よく見ることができかを考えると、現行の方法しかない。採点では、**perspective** がどのくらいあるかに重点がおかれている。しかし、文化を習得するには時間がかかるため、高校で四年間日本語を勉強しても洗練された日本の文化を身につけることが難しいのは明らかである。実際、**AP** 試験においてもステレオタイプや一般化しすぎているケースが多く見られるが、採点時、そのようなもので減点することはない。過剰に一般化していても **perspective** をもっていれば評価している。

質問 5： 文化は量るのが難しい、または不可能だとされているのになぜ量らなくてはいけないのか。量らないという選択肢はないのか。量らなくてはいけないとした場合、それをディスカッションの中での発話ではなくスピーキングで行なうのは最善の方法なのか。また、評価では **perspective** に重点がおかれているが、どのような **perspective** を求めているのか。

當作先生： スピーキングではプレゼンテーションスキルを調べているのであって、文化を調べること自体は主要目的ではない。実際、採点時(採点基準は七月中旬公表予定)には三つの項目で評価しているが、その三つの中に文化という項目はなく、文化は一つの項目の中の一部でしかない。つまり、このスピーキングで文化を **100%** 調べているわけではなく、プレゼンテーションというカの中で

文化がどのくらいわかっているかを調べているということである。文化が調べられないなら忘れた方がいいという考え方も一つの正論ではあるが、その考えにしたがうと **Course Description** から文化が消えることになり、その結果、文化を教えなくなる先生も出てきてしまう。これは望ましいことではない。

採点時、ステレオタイプでも過剰な一般化でも **perspective** があれば評価していると述べた。それは、日本語初心者に試験でそれほどのものを要求しないのと同様、文化についてもそれほどのことを要求できないからである。文化にも習得の過程があり、特に海外で日本語を勉強している場合、学生は日本文化に身を置いて直接経験しているわけではないのだから、知識としての文化の比重が大きくなるのは仕方がないことである。**AP** 試験はこのようなコンテキストで作られた試験として諦めざるを得ない部分はあるが、この制約の中でアチーブメントテストとして文化を調べる方法としてはこの評価方法が限界である。

質問 6: 評価者のバックグラウンドや文化を捉える枠組みが全く異なるのに点数化すると、知らないがために間違っているとみなしてしまうようなことが起こるのではないか。また、文化の評価ではなく、心理学・社会学的分析能力の評価になっているのではないか。

當作先生: **ETS (Educational Testing Service)** は **inter-rater reliability** を重視しているから、複数の評価者間で同じ点がつくようにしっかりトレーニングをしている。採点時、一つの設問の回答を評価するのは基本的に一人であるが、評価者としてのトレーニングの段階で、**AP** コースの内容を考えて、どのくらいのことを文化として学生に知っておいてほしいかということについて摺り合わせをしている。つまり、一人の考えを押しつけるのではなく、採点者たちが話し合っとういものに何点をつけるかを決めている。学生の回答には深い **perspective** を示しているものもあるが、それが必ずしも満点になる基準ではない。文化習得の初期段階では間違っただけの見方も出てくるから、視点はどこにおいてもいい。ただし、単に事実を述べる以上のレベルにはいってほしいと望んでいる。

文化の運用能力は例えばディベートや **OPI (Oral Proficiency Interview)** を通して顕在的に調べることができるが、文化の分析能力は限られた部分しか

量れない。したがって、外国語のクラスの中の文化を考える時、この二つを分けなければいけない。AP 試験では、**cultural perspective presentation** の項目以外でも文化の運用能力的なことを調べている。その際の基準は、「これは日本語で適切な答え方であるか」ということである。

## (2) Professional development について

質問 7: AP とアーティキュレーションに関して教員にどのような研修が必要であるか。

當作先生: 教師研修の基本は、参加者が教室に帰って使って欲しい方法を用いて研修することであるから、例えば「学習者中心」の研修であるなら研修も「学習者中心」でやるべきである。参加する教員のバックグラウンドは様々であるから、研修を通して新しい知識が加わったことによる結果も様々であり、また、そうであるべきである。研修者のやり方を参加者に一方的に伝授するだけではうまくいかない。

質問 8: 高校では **National Standards** に沿った授業を行うために様々な先進的な方法にチャレンジし、最近ではコンテンツを中心としたプロジェクト型へと大きく変化しつつあるが、大学側でも **National Standards** や AP の動きをもっと研究する必要があるのではないか。

當作先生: **Professional development** の機会が大学より K-12 の先生方の方に多いのは事実であり、それには以下のような状況の違いがある。K-12、特に公立の K-12 の学校は法律によってコントロールされていて、例えば “no child left behind” という教育法が制定されれば、それに見合った教育ができるように教員の教育能力を上げなければならない。またそうでなければ教員は仕事が確保できない。外国語のクラスで言えば、新しい外国語教授法や第二外国語習得理論に基づいて効果的に教えられるようにならなければいけないということになる。州や国は義務教育に責任があるから予算や助成金を出し、そのための研修を多く設け、その結果、先進的なアプローチにつながっている。一方、大学はそのような状況にはない(法によるコントロールはない)こと、また義務教育ではないから研修も大学独自にすればよいという政府の考えから大学の教員用の研修だと予算がとりにくいという事情などがあり、研修の機

会は多くない。そのため、先進的なアプローチに触れる事が少ないというのは否めない。また大学では、“academic freedom”という考え方が大学の教員の基本として広く浸透し、独自の考えを実践する権利があると認められていて、高校とは異なった状況もある。

大学の日本語教育を見ると、初級レベルには最新の外国語習得理論に基づいて教室で一番効果的に日本語を習得するためにはどうしたらいいかを考えて書かれた教科書があり、広く使われているが、中・上級レベルではこの点が遅れていると思う。それぞれの教師が独自の経験に基づいてカリキュラムを作って実践しているところが多いのが現状ではないか。そしてその場合、果たしてそのやり方が与えられた状況の中で最も効果的であるとその先生が証明できるか、という疑問である。ここでカリキュラム論が大切になってくる。自分のカリキュラムに対する理論的な基盤をはっきりさせ、各教師がそれを明確に言えるようにならないといけないのではないか。現状では、大学の四年間で、ほとんどの学生は ACTFL OPI のスケールで intermediate-low から mid、強い学生でも intermediate-high までしか伸びず、advanced level に達する学生はほとんどいない。その理由として考えられるのが、一・二年と三・四年のレベル間のアーティキュレーションがしっかりしていないことと、三・四年のカリキュラムが充実していないことである。特に、中・上級においては、スタンダードの考え方、content-based、thematic unit のような先進的な考え方を取り入れてみたらよいのではないか。

National Standards についていえば、外国語教育の目標を広くしているいろいろな面から外国語教育をする、という意味でもよい考えだと思う。日本語を勉強して卒業した学生はいろいろなスキルを身につけているからいろいろな業種で仕事ができる、というように学生を作り上げておくことは、大学で外国語教育が生き残っていく上で非常に大切なことである。また、外国語を取ることによって卒業生の価値が高まるというようなことを提唱できるようにならないといけないと思う。

### (3) 大学の中上級レベルの問題と differentiated instruction について

質問 9: 大学には、上級日本語コースとして文学の先生の指導の下、日本語で文

学を読むクラスが設置されているプログラムがあり、その場合、中級レベルの日本語のクラスでは学生の日本語をそのレベルに到達させることが目標の一つになっていて、したがって、これまで中級へのプレースメントテストではそのレベルでやっていけるかどうかを見てきた。AP が始まり、中級へのプレースメントが一つの鍵になってきているが、高校側からはどのようなプレースメントテストを望んでいるのか。

當作先生： 大学の外国語教育の一つのモデルとして、一・二年でコミュニケーションや文法を学び、三・四年で文学に進むというものがあるが、2007 年に出されたこれからの外国語教育のガイドラインの中で、MLA (Modern Language Association) はこのモデルをやめようと提案している。MLA は言語・文学の団体であるが、その団体が文学至上主義はやめようと言っているのである。文学の先生方とも話し合ってみてまずはプログラムのあり方を考え直すべきで、これはそのきっかけになるのではないかと。

プレースメントテストでは、何かが欠けているからこのレベルに入れる、という **deficiency model** は避けるべきだと思う。例えば、漢字をいくつ知っているかによってレベルを振り分けるのではなく、漢字を使ってどのくらいのもので書けるのか、またどのくらいのレベルのもので読めるのか、という見方でプレースメントをする必要がある。テストは総合的に見て、このレベルからこのレベルの学生はこの学年で扱う、というように判断するのがよい。

このようなプレースメント方法により、一つのクラスにいろいろなレベル、バックグラウンドの学生が存在する状況が生まれるが、そのような状況に対処する方法を知っておくべきである。ここで有効なのが **differentiated instruction** という考え方である。これは、学習者がもっている経験や知識を生かしそれを利用して教える、という学習者中心の方法であり、この方法では異なるバックグラウンドやレベルの学生が一つのクラスにいることは、お互いに教えさせることができるという意味からポジティブなことである。大学の中上級には、そのプログラムの下レベルから上がってきた学生、夏に日本で勉強して帰ってきた学生、高校で勉強してきてそこにプレースされた学生など、様々なバックグラウンドの学生が入ってくるため、この **differentiated instruction** の考え方が当てはまる。例えば、学生同士の共同作業やグループアクティビティを持ち込むことによ

て、いろいろなタイプの学生がいることを利用して今までよりも効果のあるクラスを作ることは可能であると思う。Tomlinson の “differentiated instruction” という本には、レベルやバックグラウンドが異なる学生がいる外国語のクラスでどのように教えたらいいかというテクニックが書かれている。スキル別のカやラーニングスタイルに違いがある学生がいるクラスで、どのようにカリキュラムを作ってどのようなアクティビティをしていったら効果的なクラスができるかということについて上手く書かれている。それを読むと、教科書に頼ったティーチングから抜け出して、もっと効果的なクラスができると思う。そうすると、AP の学生が入ってきた時も楽になるはずだと思う。先生にとっても楽だし、学生にとってもアーティキュレーションがうまくいってもっと能力が伸びると思う。Advanced-low くらいまで伸びる学生が出てくる可能性が出てくるのではないかな。

Differentiated instruction の考え方には、目的の違いも含まれる。MLA の framework では、今後の大学の外国語教育の目標は、multiple paths を作ってあげること、multiple literacy をつけることであると言っている。今までの literacy は文学を読むことだけであったが、multiple literacy とは、文学が読める literacy に加え、social literacy、cultural literacy、technology literacy なども含む。つまり、日本語を学ぶことによって一つだけではなく multiple literacy をつけようということが目標に掲げられていて、外国語を学ぶ価値が高まるという意味からも 21 世紀の外国語教育にとってはいいことだと思う。学生に multiple literacy をつけさせようと思うと、先生が中心になって一つのやり方でやるよりも、differentiated instruction を取り入れて学生の中から自発的に学習がおこるような設定が望ましい。

#### (4) 教科書の文法項目について

質問 10: 大学の中級の教科書には、なぜこの文法をこの段階で教えなければいけないのかと感じる項目も多くあるが、文法項目を選ぶ基準は何か。

當作先生: 日本語の習得理論の研究、つまり、外国人学習者がアメリカの教室という環境で日本語の文法をどう順序で覚えていくのかという研究、が遅れているのが現実である。では教科書を書く時にどのように文法の順序を選ぶかということ、入れやすいものから入れる、あるトピックが話しやすい文法を入れる、



または中上級ではたまたま選んだ読み物に使われているからそこで説明しておく、というように、教科書の著者の恣意的なもので決まっていることが多いと言える。同様に、漢字の選択についても著者の恣意的な判断によっている。

#### (5) 漢字について

質問 11: AP 試験には漢字を書く試験はないが書くことに重きはおかれていないのか。

當作先生: ワードプロで変換して認識できればいいと強調した AP コースが多いが、決して書くことをおろそかにしているわけではない。「認識できればいい」というのは目標であって、そこにたどりつくプロセスは学生によって様々であるから、書かないと漢字が覚えられないタイプの学生は書いて覚えればよい。ただし、手書きで作文を書く機会が減っているために、AP の学生に関して手書きでの作文能力が落ちていると感じている大学の先生は少なくないそうである。

#### (6) アーティキュレーションと宣伝活動 (advocacy) について

質問 12: 縦・横のアーティキュレーションを作っていくためにも教師自身のコミュニケーション能力を高めていく必要があると思うが、そのためにどのようなことが効果的か。

當作先生: 自らを外に向けて発信していくという点において、日本語の先生は他の言語の先生に比べてかなり遅れていると思う。自分から率先して外に行くようにしないといけないと思う。コミュニティとの関わりを考えてみても、広い意味では大学のアドミニストレーション、学部長、同僚の文学の先生とのコミュニケーションなども含まれる。それら周囲とのコミュニケーションのきっかけとして、まず自分のクラスを見直し、自分のクラスでは何をしているかを宣伝したらいいと思う。「アーティキュレーションはまず自分のクラスから始まる」とも言われているのである。日本人は謙虚で自分のことを外に宣伝することをいけないことだと考える文化があるが、アメリカにいる限りそれは忘れるべきである。特にこのアメリカというコンテキストでは、自己宣伝しなかったらつぶされてしまうというくらいの危機感を持ち、外に出て行くべきだと思う。一例を挙げれば、自分のクラスのニュースレターを作り、そこに自分の活動(ワークショップへの参加や学会での

発表など)、学生の活動(日本語を使った機会についてなど)、クラスの活動(先進的なアプローチの実践など)を盛り込み、学生だけでなく学部長やディーンにも配布してみるという活動もよいかもしれない。もっと自己宣伝をして外に働きかけていくことによって、企業からもお金がきて、その資金で日本フェスティバルなどを催すことができ、それによってさらに日本語のプログラムに注目が集まって、さらにもっとお金がくるという好循環を生むかもしれない。日本人の先生はこのような自己アピールの力をつけることが非常に大切になってくると思う。

### 3. クルンパー先生・庄司先生との討論

以下の五つに分けて要約する。

- (1) AP コースの現状と問題点について
- (2) AP 試験の問題点について
- (3) AP における高校と大学との関係について
- (4) AP 試験と SAT について
- (5) 留学から戻った高校生の扱いについて

#### (1) AP コースの現状と問題点について

AP コースを設けるにあたり、その方法は高校によって様々に異なる。例えば、日本語 1、日本語 2、日本語 3 の後に 4 年目のコースとして日本語 4 ではなく AP 用のコースが設置されていたり、7 レベルある IB プログラムの中の 1 レベルが AP 相当コースとして設けられていたりする。また学校によっては、例えば「日本語 4 と AP コースの合同クラス」というように、複数のレベルを一つのクラスで教えている学校もあるそうである。一つのクラスに様々なレベルの学生が存在する場合には、プロジェクトを用いることが効果的だと報告された。同じテーマのプロジェクトに生徒それぞれのレベルで取り組む事ができるため、異なるレベルの学生を一つのクラスで扱う事が可能な場合が多いという理由からである。また、生徒の人数がある程度いないとコースを設けることができないという事情により、複数のレベルの生徒を一つのコースに入れざるを得ないという状況もあるそうである。そのようなクラスでは“**differentiated instruction**”が効果的かつ必須であるとみなされているそうである。

AP 日本語が始まったことによりそれまでとは異なるシラバスを作成する必要があり、当初、現場

には混乱も見られた。三年経過した現在、新しい方向性は出てきてはいるが、同時に AP コースがある高校とない高校の日本語プログラムではレベルの差が広がってきている。このような現状では、まだ AP コースに取り組んでいない高校や教師への積極的なサポートが不可欠なようである。実際カリフォルニア州では、教師会によって、AP に未着手の教師のリクルートなどが行なわれている。AP コースを設ける学校数を増やすために、高校のアドミニストレーションに対する積極的な働きも必要ではないかと提案されたが、アドミニストレーションと日本語プログラムの関係はそれぞれの高校によってかなり異なるようである。例えば、アドミニストレーション側が他の科目同様に日本語でも AP コースを設けるように指示をしても、教師側にそのための準備ができていなかったために期待された成績を上げられずに翌年度には AP コースをつぶされてしまった高校もあれば、26 人もの生徒が受講を希望し教師もその準備ができているにもかかわらずアドミニストレーションから許可がでないために AP コースが実現されなかった高校もあるという。前者のようなケースには、すでに AP コースを指導している教師がまだ AP を始めていない教師の支援者として助言をしていけるようなシステムが有効なのではないかと提案された。

AP コースのレベルの設定についての問題点も指摘された。AP 日本語コースは大学の日本語コースで 300 時間程度の学習を終えたレベルに到達することを目安にしているが、300 時間でカバーする内容や達成するレベルは大学間で非常に異なっている。また、相当レベルを調べるために大学生にも AP 試験を受けさせているが、それに参加する大学にも偏りがあるそうである。また同様に教授法も大学間で非常に異なっている。したがって、何をもって大学レベルのコースとし、何をもって 300 時間終了レベルとみなすのかの定義が難しいという問題である。現在、高校では AP コース以外のクラスでは主教材として“Adventure”シリーズが使われていることが多く、単語や漢字の導入なども授業時間内で行なわれているそうであるが、AP コースになると教科書を大学で使われているものに変更し、単語や漢字などは予習してくるものとみなし、読んだり書いたりする作業を宿題にしたりと、それまでのコースとはかなりやり方を変えて、大学での一般的なやり方に近づけているという例が報告された。

## (2) AP 試験の問題点について

まず、現在の AP 試験がすでに難しいと言われているのに、今後さらに難易度をあげていこうとするのはなぜなのかという点について話し合われ、二つの見方が提示された。一つ目は、AP 試験作成時にカレッジボード (College Board) がカバーすべき基本的なトピックを目安として提示するが、それは全ての外国語の AP 試験に共通して提示されるもので、そこには言語による難易度の違いが考慮されていないため、習得に時間のかかる日本語の学習者にとっては困難と

思われる設問も試験に含まざるを得ず、これが試験の難化につながっている要因であるという見方である。二つ目は、AP が大学レベルに相当しないのではないかと批判に対応できないため、AP 試験のレベルを上げざるを得ないという見方である。初年度の試験と比較すると今年度の試験は難易度が下がっているのではないかと思われるふしもあり、それをもとに戻すために今後難易度を上げていくのではないかとということも含まれる。前者に関しては、言語間で言語習得に要する時間数が異なるにもかかわらず一つの枠で全ての外国語の試験を設定するのは誤りなのではないか、二つ目の点に関しては、AP 試験の基準が毎年揺れているようでは受け入れ側の大学で AP の得点が信頼できなくなり、したがって受け入れの基準や対策を立てるのが困難になるのではないかと、という指摘がされた。

次に、AP 試験のあり方について、能力試験ではなくアチーブメントテストであるために AP コースではテストで高いスコアを取るためのストラテジーを教えることに重点が置かれてしまっていないか、という点から議論された。これに対し、一つの意見として、AP 試験はスタンダードに基づいて言語能力を伸ばすためのものであり、AP 試験に通るための勉強をするそのものが言語能力を高める指導につながっていて、試験のあり方には大きな問題はないという見方が提示された。例えば、試験の会話問題の一つは、質問を聞いてその後 20 秒でできるだけ詳細に答えるという設定であるが、この設定に慣れるために理由とともに自分の意見を 20 秒以内ではっきりと述べる練習をすることは、コミュニケーション能力を高めることにつながり、試験のみならず通常の会話でも役立つスキルとなるはずであるという。これに対して、実際には状況によって一言での返答でも 30 秒かかる返答でもコミュニケーションとしてきちんと成立するはずで、いつも 20 秒で答える練習をしているのだとしたらそれは不自然なコミュニケーションになるのではないかと意見が出された。また、一つの会話試験が四つのプロンプトに答える形式になっている場合、一人の採点者がすべての返答を見るのではなく、一人の採点者は一つのプロンプトに対する返答だけを採点するようになっているため、理由を述べることを求められた時に学生はすでに前の返答で述べたからそこでは述べなかったというような場合にも、採点者はそれを判断することはできないという状況があり得る。このような場合に減点されてしまうことを防ぐために、AP コースでは、たとえ繰り返しになったとしてもいいからなるべく詳細に答えるよう指導しているという報告もあった。これも実際とは異なるコミュニケーションを助長していることになり、AP コースで試験のためのストラテジーが強調されている一例である。また、「～はどういう意味ですか。」「わかりませんでした。もう一度お願いします。」というような発話は実際のコミュニケーションで使われているものであるが、AP 試験で使われた場合は聞き取りができなかったと判断され、0 点になるそうである。このように実際のコミュニケーションと相容れない点がいくつか指摘されたが、試験として一定の時間内に多数の学生のスピーキングを評価する状況がどこまで実際的かと考えると、そこ

に多少の無理があるのは否めないようである。

AP 試験の最終スコアは 1 から 5 で表されるが、採点時はそれぞれの回答が 0 から 6 で評価される。6 が取れるのは継承語学習者である場合がほとんどで、スタンダードグループの学生にとっては 5 を取ることも難しいという。ただし、継承語学習者が流暢に話したとしても内容がなければ 3 と評価されることもある。また、試験の準備をせずに AP 試験を受けた継承語学習者の中には、質問に対する答えを知識として持ち合わせていなかったがためにトピックの焦点を変えてスピーチした学生もいたそうだが、その場合、それ自体が非常にすばらしいスピーチであったとしてもトピックがずれているという理由で 0 と評価されるそうである。このことから、AP 試験でよいスコアを取るためには、能力だけではなく受験用の戦略が必要だということになる。

また、質問内容についても問題点が指摘された。昨年度の試験で、比較・対照させることを意図した問題で「漢字・かな混じり文とローマ字書き」を比較させた質問があった。この質問がおかしいと感じた関係者は少なからずいたはずだという。また、会話の試験でも、提示された写真がクラスの前で発表しているような写真であったために、個人レベルの会話ではないと判断し問題の意図を取り違えてしまった学生もいたそうである。このような問題点は、カレッジボードのテスト作成委員会に直接報告するよう提案された。

### (3) AP における高校と大学との関係について

まず、高校から大学への移行時における困難について大学側から報告された。大学では、四年間という限られた時間の中で、初めて日本語を学習する学生を日本社会で大学レベルの教育を受けた人たちと対等にコミュニケーションできるレベルにまで持っていくという目標を達成するため、最短距離でできる方法が選ばれていることが多い。一方、高校では、もっと長いスパンで日本語教育を捉え、コンテンツを取り入れたり様々な活動を通して日本語を習得させるという方法を採用していることが多い。そこにはアプローチに大きなギャップがあり、高校での学習方法になれて同様の期待を持って大学に入ってきた学生を、まず大学のやり方に適応させて、さらに上級へと導いていくことが非常に困難であるという。

また、AP が始まってから大学側で見られる変化については、以下の点が挙げられた。以前は、高校で日本語を四年間勉強してきてもプレースメントテストにより一年生に入る学生が多かったが、最近では二年生、三年生のクラスに入る学生が出てきたという点である。高校の四年間で漢字を全く勉強したことがなかったために、大学で一年生のクラスに入らざるを得なかった学生なども

いたが、最近はそのようなケースはなくなってきている。これには **Course Description** で漢字の導入が定められた影響があると思われる。このようなよい変化が見受けられる一方で、**AP** コース出身者には大学の日本語のクラスでスピーキングで非常に苦勞している学生が少なくないようで、話す力があまり強くないという特徴が共通して見られるという。この傾向について、考えられる理由が二つ挙げられた。一つ目は、高校と大学のプログラムでスピーキングアクティビティが質、量ともかなり異なるのではないかと、という点である。これに関して高校の先生方からは、応用力をつけさせる努力が高校でも必要かもしれないという意見と、話すことの方が得意なために大学で一つ上のレベルのクラスに入れてもらえた学生もいるから一概には言えず、学生にもプログラムにもよるのではないかと意見が出された。二つ目の理由は、言いたいことがあっても日本語で言えないとすぐに英語になってしまう傾向もあり、難しくてもなんとか日本語で伝えていこうとする訓練ができていないのではないかと、という点である。大事なことは英語で言ってしまうという習慣がついてしまっていると、英語を使ってはいけないことにフラストレーションを感じて話せなくなってしまっている学生もいるという。

これに関連して、**AP** 試験で **5** を取った学生の一例が報告された。この学生は大学では二年生のクラスではやさしすぎたため三年生のクラスに入った。知識としては持っているので読むこと・聴くことには何とかついていけたが、ディスコースレベルで話したり論理的に書いたりする力が非常に弱く、持っている知識を使って能動的に生み出していく言語活動で苦しんだという。**AP** 試験で **5** が取れたとしても大学で三年目のクラスに入ると苦勞するケースは他にも少なからずあるそうで、高校の先生からはこれは納得のいく例であり、このような場合、たとえ内容は復習になるとしても、むしろ二年生に入って大学での勉強の仕方や授業のスピードなどに慣れていった方が長い目で見れば成功するのではないかと声があった。また、これは **AP** 試験の得点 **5** にもいろいろな意味があるということを示唆して、したがって得点だけによる自動的なプレイスメントはあまり有効ではないのではないかと指摘された。

高校から大学へのスムーズな移行には、受け入れ側の大学が努力するだけでなく、高校側でも大学でどのような授業が行なわれているのかを知ることが大切なのではないかと、双方がお互いの授業を見に行くような交流がスムーズなアーティキュレーションにつながるのではないかと意見が出された。また、**AP** コース開始に当たって高校の先生方が受けたようなワークショップを大学の先生も受けるべきではないかという意見もあった。

#### (4) AP 試験と SAT II について

AP 試験と SAT II (Subject Test)との差が大きく、大学ではどちらの結果を考慮すべきかという声も出ているという。二つの試験は内容、方法、結果の使用目的等において異なっている。例えば、AP 試験では四つのスキルから総合的に言語の力と文化の知識を量っているのに対し、SAT 科目別試験では **presentation skill** などは見ていないし、文法問題でもコンテキストのない中で文レベルで正しい語句を選ぶような設問である。AP コースを履修した学生は大学に提出される成績表に「AP」と記載されるが、高校に SAT 科目別試験用のコースというものはない。継承語学習者には AP 試験より SAT 科目別試験の方が点がとりやすいこともあり、多くの日本語母語話者や継承語学習者が SAT 科目別試験を受けるが、外国語として日本語を学んでいる学生にとっては高いスコアを取ることは難しい。したがって、高校生は大学に応募する際にどちらの試験結果が自分に有利になるのかを考えて、試験を受けているそうである。

#### (5) 留学から戻った高校生の扱いについて

日本に留学して帰ってきた生徒は、間違った待遇表現の使い方を覚えてしまっているなど、言語的に問題があるまま戻ってくることも多々あるが、日本で生活していたために文化的には様々なことを身につけてきている。そのような生徒をクラスでどのように扱ったらよいかということについて話し合われた。まず、間違っ覚えてきたものを“undo”して教え直すべきか、という点について、二つの意見が出された。一つは、日本語を学び直させられているとコメントした学生が実際にいたが、そうせざるを得ないという意見であり、もう一つは、“undo”するのではなく、間違いも学習につながる材料の一つとして捉え、ディスコースとして授業の中で活用していく方向に持っていけばよいのではないか、という意見である。また、“differentiated instruction”の考え方を当てはめ、学生の留学経験によるレベルやバックグラウンドの差をクラスで有効に使うようにすれば、違いをプラスに持っていけるのではないかという意見も出された。